
とある世界の感染病＜パンデミック＞

奏龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある世界の感染病×パンデミック

【著者名】

奏龍

N1092N

【あらすじ】

とある青年、長谷川紅夜は学校の教室で外の景色を眺めていた。すると変な人影が目に映った。その人影の正体は・・・?
そしてその人影は紅夜の生きる世界にどのような影響を齎すのか!?

[http://ncode.syosetu.com/n1085z/ 京谷作小説](http://ncode.syosetu.com/n1085z/)
<http://ncode.syosetu.com/n9332>

y/
/

格作小説

束の間の平和（前書き）

これが初投稿なので誤字脱字など変なところがあるかもしれません
が大目に見てください。

束の間の平和

2015年 5月上旬。

そろそろ暖かくなり始め、心地のいい風が吹き始める季節だ。

そんな中、青春時代真っ只中のとある青年がいた。

その青年はとある学校で・・・

「ふうわああ～・・・」

（5時限目の社会とか・・・マジないわあ・・・。）

・・・などと欠伸をしながら内心で愚痴を吐いていた。

その青年の名は長谷川紅夜。

今年の4月に高校生になつたばかりのピカピカの1年生だ。

高校の授業にも慣れ始め、欠伸などという余裕たっぷりなことをしている。

そういう時寝ないために決まって外の景色を眺める。（カーテンが閉まつてると寝る）

そして視界に入ってきたのは・・・カメムシ。

思わず発狂。

「ん? どうした? 長谷川。」

（まなぶ） そう問い合わせてるのは只今社会の授業をしている塙本学。（通称

「い、いや。
そこにカメムシが・・・。」

「…………」

クラスの全員の注目が一斉に俺へと向く。

「みんなのものー！ 至急この教室から退避せよー。」

そうやって指示を出したのは俺の親友であり学級委員長の神前皇太。

「…………」「…………」「…………」「…………」

そしてクラスのみんな（+まなぶ）が速やかに退避・・・なんという正統率。

ここは田舎町な為クラスが一つしか無く、全員中学校からの知り合いだ。

よって中学校でのこのクラスの決まりが未だに活きていく。

それは・・・カメムシが発見された場合第一発見者が駆除する。・・・といつものだ。（先生方からも了承済み）

発見したのをバレなきゃいいと思うかもしれないが・・・このクラスにカメムシを見て叫ばないやつはいない。

ガタン・・・ガサゴソ・・・バタン

掃除ロッカーから取り出した箒と塵取りで武装。

「おんぞれカメムシめがああああーー！」

激闘の末、無事駆除に成功。

「みんなー無事駆除に成功した。万事オーケーだ。」

クラスのみんなが帰還。何事も無かつたかのように授業が再開される。

「ふうわああ～・・・」

またもや欠伸。今度はカメムシがないことを祈りながら外を見る。

「どうやらカメムシはいないようだ。」（ふう～）安堵のため息。

すると校門を通り校舎に近づいてくる一人の人影が見えた。

（この学校に人が来るなんて珍しいな……ん?なんか妙にふらついてるな。）

しばらくすると「おー長谷川。またカメムシか?」と言われた。

「ああ、いえ。外を眺めながら少し考え方を……」冷静に返答。

「そうか。ならいいんだ。」

（ええー。いいのかよ……。それって教師としてどうなのさ・・・。）

俺はさつきの人影をただの酔っ払いと思いそのままスルーした。

（ま、ただの酔っ払いなら後で教職員の誰かが注意しに行くだろ。おっと、そろそろノートとらないと授業が終わっちゃう。）

キーンコーンカーンコーン

ノートも無事とり終わり5時限目終了のチャイムが鳴った。

「 「 「 ふう～やっと終わったー」 」 」

（クラス全員でハモるとは・・・恐ろしい・・・。

気持ちは分からんでもないが、まだ6時限目がる。）

そんな極普通（？）の高校生活を送っていた俺たち。

そんな平和な日常が数時間後には地獄のような世界に生まれ変わる
とは、誰一人おもわないだろ？・・・。

束の間の平和（後書き）

以上まで読んでくださった皆様、誠にありがとうございました。
連載していくつもりなのでもよかつたら今後ともよろしくお願い
します。

世界が変わった日（前書き）

これで2回目の投稿となります。
どうか温かい目で見守ってください。

世界が変わった日

キーンゴーンカーンゴーン

6時限目始まりのチャイムが鳴る。

「 」はあ～あ。 「 」

またもや全員でハモる。

（相変わらず息合ってるな。このクラス。これがもつとほかの事に活かされればいいんだが・・・。）

そして6時限目が始まってすぐのことだった。

「 ・・・やあ・・・あ・・・」

微かに悲鳴のような声が聞こえた。

「ん？」

すると「どうかしたか？長谷川。」

やつはいたのは国語教師の米倉元樹（通称よね）

「今何か聞こえませんでした？」

「なんだー？ 誰か屁でもしたか？」

・・・・・・・・衝撃の返答。

「チゲー ピ。」

思わずタメ口。

「なんかひつ、悲鳴みたいな？」

「悲鳴？ そんなの聞こえなかつたぞ。」

（先生もひつて言つてゐし、他のクラスメイトにも反応はない・・

・只の空耳・・・
だといいけどな・・・。)

何故かそのとき俺の頭の中にあの酔っ払いの姿が浮かんだ。

(あれから酔っ払いの姿を見ていない。それなのに教職員が動かない・・・?)

嫌な予感しかしねえ!)

さつきの悲鳴らしき声・・・クソッ、

と、その時。

ジリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリ

学校の警報のベルがなった。

(チツ、予想道理・・・ってことかよ。)

『不審者らしき人物が校舎に侵入しました!生徒の皆さんには先生の指示に従つて直ちに教室にバリケードを作つてください!繰り返します!生徒のみな・・・塙本先生!こんなところなにを!・・・?塙本先生? 一体なにを・・・? やめてください! やめ・・・うああああああああああああああ!』

「おい・・・今の何だよ？ どうして塚本先生が！？」

クラスメイトの一人がそんなことを言った。

だが俺はそんなこと気にも留めなかつた・・・それは、外の光景が異常すぎて畳然としていたからだ。

「おい・・・みんな！ 外を見てみろ！」

俺は思わず皆に叫び掛けた。

「おい・・・なんだよあれ・・・？」

「人が人を・・・襲つてゐる・・・？」

「しかもなんだよ・・・あの数・・・。」

「おい皆ー 早くバリケードをー！」

米倉先生がそんなことを言った。

「いや。ダメだ！」

俺は咄嗟に口を出した。

「どうしてだーー？」

「おそれらの学校に侵入している不審者もあいつ等と同じだろう。だとしたらここに留まるのはマズい。あの数に侵入されたらバリケードなんてすぐに破壊される。しかもここは3階だ。飛び降りて逃げることもできない。だからと云つてそのまま学校を出るのもマズい。」

「じゃあどうひつこうんだーー？」

当然の疑問が返ってきた。

「武器を持て！ 」こんな状況だし殴つたつて正当防衛として認められるはずだ！

「それと、単独行動は絶対にするな！ 4・5人のグループを組むんだ！」

俺は自分でもわからないくらい泣えていた。

そして「皆一・二・三は紅夜の言ひことに従おうー」と俺の言ひことに理解してくれた皇汰が言った。

「クソッ！ 一体どうなってるんだよ・・・？」

みんなは困惑しつつも俺の言ひ通りに動いてくれた。

そして俺はクラスメイトの神前皇汰、蒼井龍一、音無奏美の四人で行動することになった。

「よし。まずは武器になりそうな物を探そう。」

そして掃除用ロッカーを開けた。

そこには・・・対力メムシ迎撃用の簫と塵取りがあつた・・・。

「クソッ！ なんもの使い物になんねえ！ 探しにいくしかねえか。」

世界が変わった日（後書き）

読んでくださった皆さん、ありがとうございました。
誤字脱字、アドバイスなどがありましたらコメントよろしくお願い
します。

不定期になるかもしれませんが今後も連載していくますのでよろし
くお願いします。

<http://nocode.syosetu.com/n9332y/>
http://nocode.syosetu.com/n0485z/

この「R」は同じ原作を基にして書いた人たちの「R」です。
よかつたらこひらにも田を通じてみてください。

初めての殺人？（前書き）

もう3話目ですね。なんかもう定期的に投稿するのは面倒になつたので投稿してしまいました。突然投稿遅くなる恐れがありますがご勘弁願います。

初めての殺人？

俺たちはあこいつ等に遭わなこよつに慎重に歩を進めていた。

「武器つつても何があつかな？」

「やつぱりまじめにやがてよな。」

「それじゃああやのモップなんて使えないかしきりへ。」

「どうやつて使うんだ？」

「金属の接合部分をねじって千切るのよ。そつすれば先端が尖つて
こだといつ時にも使えるわ。」

「なるほど。 どうやつても…・・・チッ・」のタイミングで来るか

「…」

「どうやつて来たのやー。」

すると皇汰があこつに向かって歩き出した。

「おこーどうするつもりだー?」

「俺は少し武道には自信がある。足止めをするから今のうちに武器を頼む。」

「・・・分かった!無理はするなよ。」

俺たちはモップのあるほうに走った。

そしてモップの接合部をちぎり終わってすぐに・・・

「クソッ!なんだこの異常な握力は!?」

「皇汰!大丈夫か!?」

俺はモップで作った槍もどきをもつて皇汰の方へ走った。

「ぐああああああー!」

（クソッ！）のままじゅマズイ……（

「つまつまおひつわあ！」

躡いた……。

そしてそれと同時に皇汰があいつを大きく蹴り飛ばした。

そして俺の手にじていた槍もどきの先端があいつの心臓部を通り貫通した。

「！？！」

俺は慌てて槍もどきから手を離した。

（俺は……人を殺してしまったのか……？）

そう思った矢先、あいつは「ちりに振り返り襲い掛かってきた。

「！？」心臓を刺されてもまだ動けるのか？！？」

俺は転んだままの体勢で避けられず捕まってしまった。

そしてあいつは俺に噛み付こうとしてきた。

(やべえ・・・殺られる…)

俺は思わず口を開いた。

ドスウン!!

だがその後すぐに鈍い音が聞こえ、俺は口を開けた。

そうすると龍一がもう一本の槍もじきだあいつの頭部を強打してい
る姿があった。

そしてそいつは力なく床に崩れ落ちていった。

初めての殺人？（後書き）

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございます！
こんな小説ですが、どうか次話の方もよろしくお願ひします。

下の方に友が書いた小説のURL貼りますんで、よかつたら見てくださいな。

<http://ncode.syosetu.com/n1085z/>
<http://ncode.syosetu.com/n9332y/>

明かされていく正体（前書き）

不定期で申し訳ありません・・・4話目ですん。
もしよかつたら感想、評価などの方もよろしくお願ひします。

明かされていく正体

「……やった、のか？」

「ああ、どうやら完全に動かなくなつたよつだ。」

「ふう～とつあえず助かつた。サンキューな龍一。」

「あー、なんだ、当然のことをしただけだ。それにしても……。」

「

「……」

「心臓を刺しても……死ななかつたわよね？」

「これはあくまでも俺の推測だが……あいつは既に死んでいたんだと思つ。」

「はあー?」「や、そんな」とつて……?」

俺と龍一はキレイにハモつた。奏美は”さすが女の子”と言つた

といひか。

「俺はあいつに掴み掛かられたとき抵抗するためにあいつの腕をつかんだんだ……。

だが、あいつには脈がなかつた。そして何より、心臓を貫いても倒れず、

頭部にダメージを「」えることによつて無力化出来た……。
それともう一つ、あいつ等はやたらと噛み付きたがつてくる。
知識があるとも思えない。たぶん、本能の一種だろ。」

「あいつ”等”ってことは他のヤツもやつなのか？」

「ああ、教室で外のあいつらを見たときも噛み付いていたからな。
そしてその噛み付く意味だが、奴等に噛まれた者は奴等になる。
そうやって仲間を増やしていくんだろう。感染病みたいなもの
だな。」

（しかし、あんな状況で冷静にあいつ等を観察し、分析して誰でも
納得出来るように
文を構成し論じる。中学校からの付き合つだが、相変わらずス
ゲエな……。）

「そ、それじゃあまるでゾンビみたいじゃない！？」

「俺らが知ってるものとして、それが一番近い存在だろ。」

「ん、そんな・・・。」

とても信じがたいことだが、いまはやつ考えるのが妥当だろ。

「あいつらはもう人間じゃない・・・それならなんの躊躇もなく攻撃してもよせそうだな。」

「ああ。 そういうこと」「ひらの命が危ないからな。」

俺たちが今後の対策を考えていると、俺の田にとんでもない光景が映つた。

「・・・・・おこおこ、マジかよ。」

「どうした？ 紅夜。」

そう言つて皇夜は俺の視線の方へ向いた。

「ツー！ なんだ・・・あの数は・・・。」

「今思い出したんだが、さつき言ひ忘れたことがある。あいつ等は目が見えず音にだけ反応習性がある……はず。」

「はず」つてお前……。

「嘘……でしょ〔だろ〕？」

俺たちが見たのは二十三程先から「ひらにゅうくつ」と近づいてくる大勢のあいつらの姿だった。

「クソッ！ 後ろにはいけねえぞ！ ……やるしかねえのか……。」

すると俺は皇汰に肩をつかまれた。

「まで紅夜。あの数を一体どうするつもりだ？」

「そんなこと言つたつて……他にどうしてんだよつ……？」

「俺だつて実際に試したわけじゃない。だが、あいつらの行動を見る限り、

その可能性は高いだろ?」

「クソッ・・・どの道それしか方法はねえか・・・。」

「そういうことだ。」

明かされていく正体（後書き）

私の小説は展開が遅い気がします・・・。

たぶんこれからもこんな展開スピードだと思われます（＝・・・・
、＝）

そんな私の小説をこれからもよろしくお願ひします m（――）

m

新たな仲間（前書き）

4話との間が結構空いてしまった・・・。申し訳ない。
こんな僕ですがこれからもよろしくお願いします！^_^

俺たちは近くにあった花瓶を教室の中にあるロッカーに投げつけた。

パリイイン ガシャアアン

すると、あいつ等は一斉に音のした教室へと向かって歩き始めた。

「よし。 なんとか成功したな。」

「これからはなるべく音をたてずに行動するべ。」

俺たちはあいつ等のいないところへ今後につっこめて話しかけていた。

「やつぱつは全員分ほしことじひだな。」

「頭が弱点だとすると打撃系の武器がよむれつだ。」

「遠距離系の武器もほじこじひだ。銃とか。」

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

「軍才タキター」

「でも遠距離ひとつでも簡単に手に入れられなーだろ。」

「俺の家にガス式の釘打ち機があるー。」

「家までまじりでまじりで行くべー。」

「・・・・車なら運転できる(・・・・)」

「ドヤ顔はさて置き、確かに援護射撃者はこいつも撃はないな。」

「となるとまずは車の入手だな。」

「よし。鍵なら職員室にあるはずだ。まずは全員の武器を手に入れから職員室に向かおつ。」

俺たちは動き回るのを避けるため、武器はモッブで作った槍もどきで統一させた。

途中途中あいつ等を無力化していきながらなんとか職員室前まで来ることが出来た。

あると聴聞^{スル}の母から

という叫び声が聞こえた。

「マズいつ！ いそぐぞ！」

その声を聞き俺たちは急いで職員室へ突入した。

「おい！大丈夫か！？」

「紅夜じゃない！」

「すまねえがこの有様だ助太刀頼む！」

職員室にいたのはクラスメイトの篠崎美香と銀真人だった。

「篠崎と真人は」いつ等の弱点分かるか?」

「ああ、頭だろ!..」

「オーケー。そんじゃあいくぞ!..」

「「「了解」」」

数は相当多かつたがお互い助け合いながらなんとか排除できた。

「はあ、はあ。それにしても随分数が多かつたな。」

「おそらく俺たちと同じ考え方の奴等、教職員に助けを求めるに来た奴等が集まつたんだろ。」

「やつにえは紅夜達はどうして職員室に?..」

「ああ、車の鍵を取りに来たんだ。」

「なんだあ、私達と同じじゃない。」

「それにしても助かった。」

「気にはしない。ついでにお前達は景子と俊介とチーム組んでたよな?」

「ああ・・・。景子は職員室で来る途中、俊介はさっそく職員室でやられちゃった・・・。」

「やうやうだったか・・・。こんなこと聞いてすまなかつた。」

「・・・こんな状況だ。しかたないさ。」

「・・・」

「ねえ、美香達も私達と一緒に行動しない?」

「え？」

「そうだな。教室にいたときは状況が違つし、仲間は多いほう
がいいな。」

「いいのか？」

「遠慮すんな。皇汰の言つとおり仲間は多いほうがいいからな。」

「そういうことなら同行させてもいいよ。」

俺達は新しく銀真人、篠崎美香と仲間になつた。

新たな仲間（後書き）

「」まで読んでくださった皆様、ありがとうございます！よかったです
ら感想、評価などもお願いします！

脱出ー（前書き）

今回は割りと早めに投稿できました^ ^
これからも派早く投稿できるように努力します！

脱出！

「この人数だと車は大きい方がいいな。」

「それならまなぶのワンボックスカーが良さそうだ。」

「まなぶの机は…っと、あそこか。」

ジジジジジ—— ガサゴソ チヤリン

まなぶのバッグから鍵を取り出した。

「よし。早速駐車場に行くか。」

廊下にはそれ程あいつ等がいなかつたので外には簡単に出られた。

だが外の状況は違つた。

「結構いるな。」

「音を立てずに駐車場に行くぞ。」

駐車場にも結構の数がいた。

「さすがに駐車場の敵は倒さないとな。」

「よしーお互い助け合いながら殲滅するんだー。」

「 」「了解！」

俺達は自慢のチームワークを活かし、怪我人もなくあいつ等を全滅させることができた。

「ハア・・・ハア・・・なんとかなったな。」

「よし。新しいあいつ等が来る前にいいを出よ。」

俺達はまなぶの車に乗り込んだ。

「龍一お前本当に大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題ない。」

「なんか余計心配になつてきたわ・・・。」

ガチャ（鍵を挿す音） ブゥウウン・・・ブンブンブンブン・・・
(エンジン音)

「使い方は大体同じか。 よつしゃあーいぐぜーー。」

(((いぐつ)))

ガーン！（車がぶつかる音） 「「「うおつー」「」「キ
ヤアーー！」

「おいテメエー早速ぶつけてんじゃねえか！」

「すまん・・・アクセルとブレーキ間違えた・・・？？？
！」

（もう一回
だ！）

「 ? ? ? ? ? ? 」

(本当に大丈夫か?)

「 ? ? ? . ? ? ? ? . 」

(大丈夫だ。問題ない。)

「 その言葉を信じよう。」

「紅夜と龍一はさつきから何喋ってるの?」

「 「ふつ」 」

「なによそれー。腹立つ。」

「馬鹿一人はほつとけ。」

「 「んだテメエ!」 」

「ハモつてないでさわつと出発しる。エンジン音につられて近づいてきたぞ。」

「「ケツ」」

「あいつ等は轢き殺してもいいが、横転しないよう頼む。」

「了解。んじゃいくぞー。」

ドォンードタドタドタドタア

俺達はあいつ等轢き殺しながら道路に出た。

「燃料も満タンだし、このまま俺の家に向かう。」

走ること10分

「よしついた。紅夜、門開けてきてくれ。これ鍵ね。」

龍一の家は都会に行つてもなかなか見れないよつた豪邸に住んでいる。

ガチャ ガラガラガラガラガラガラガラガラガ

ブゥウウン ガチャ バタンッ

「龍一の家ってこんな豪華だったんだあ

「私も初めて来たわ。」

「俺達は何回か来た」とあるナビな。」

「せうにや、もつタ方か。」こないう安全そうだし、今日せうに泊まるか。」

「やうだな。今日は疲れたし、明日に備えてゆうべり休むか。」

脱出一（後書き）

「」まで読んでくださった方々ありがとうございました！
これからもよろしくお願いします！

初日終了（前書き）

4日も空いた・・・お許しを。
どうか温かい田で見合つてください。

初日終了

「ふああ～～」

それぞれソファーに座り次第溜息をついた。

「ハハ。 肩相当疲れてるんだな。」

「緊張の糸が切れて、溜まつてた疲れが一気に出てきたんだろうな。」

「

「いりこいつとおせせの風呂に入るのが一番ね。」

ぐう～

「腹も減ったなあ。」

「私達でいじ飯作るから先お風呂入つてきてよ。」

「奏美料理下手じゃなかつたか？」

「「「」」」

「飯は俺達で作るからお前達は先風呂に行つて来い。」

「あんた達ここをうまく作れるの?」

「「「」」奏美よりは」」」

「「「」」美香もつお風呂入る。」

「「「」」うん。そうね・・・

25分後

「おつ上がつたみたいだぞ。」

「龍」と真人先入つてここによ。」

「ああ、やうやくせてもううつよ。」

「はあ～気持ちよかつた～」

「よかつたら私だけでも手伝おつか？」

「いや、後はむづくり休んでていいだぞ。」

「（美香は奏美の相手を頼む）」

「（了解）」

10分後

「上がつたがー。」

「ふうー俺達も入るか。」

「そうだな。」

10分後

俺達も風呂を上がりつてきた。

一 パー パー

「お、丁度飯が炊けたな。」

「早速飯こするか。」

準備すること5分

「あーじ豪華でおこしかづく。」

「まあな。さて、冷めないうちにおこしくいいただくとしますか。」

「「「 いただきまーす」」

「「「 うさめーー。」「「 おこここーー。」「

それぞれ料理を堪能すること30分

「「「」」馳走様でした」」

「いやあーうまかつた」

「お腹一杯だわ。」

「ふう~ 今日はもう寝るか?」

「えー食べた後すぐ寝ると太っちゃうー」「

「ふむ・・・そうだ、ＴＶでも見ないか？」

「IJの時間に面白い番組なんてやつたっけ?」

「ニュースに決まってんだろ。」

「や、やだなあ。
冗談に決まつてゐるじやない。」

卷之三

ピッ

『 いじめでは只今警察を中心とした市民の救助活動が行われています。

できます。

ピッピ

俺らは幾つかのチャンネルを見回した。

「・・・ある程度は予想していたが、やはり日本全土でも同じこと
がおきていたらしいな。」

「いや、日本ビリのく世界名国でもおなじ」とがおきてるみたいだ。

L

「 「 「 「え?」 」 」

「とあるサイトを使って調べてみたんだけど、俺達が見てきたことと同じことが世界中でおきている。」

「クソツ！ 一体何が原因でこんなことがおきてやがんだ！？」

「落ち着け紅夜。 考えたって俺達だけでどうにかできる問題じゃない。」

「へへ・・・・」

「今の俺達は生き延びることだけを考えればいい。」

「明日のために今日はもうつ休みもつ。 龍一も明日は色々やることがあるらしいしな。」

俺達はそれぞれ眠りに就いた。

世界が変わった日。 俺達6人は力を合わせ、ビックリ乗り切ることが出来た。

初回終了（後書き）

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございます。
そして、これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1092z/>

とある世界の感染病 <パンデミック>

2011年12月19日18時48分発行